

## 琉球古典音楽 声楽譜の読み方

現在野村流三派（協会・保存会・伝音協）のテキストになっている声楽譜（世礼國男）は今後とも共通の楽譜として重宝されなければなりません。世礼先生が声楽譜を創案された頃は、琉球古典音楽の音組織について未だよく分かっていない時代でありました。

世礼先生亡きあと研究が進みました。結果、今日の学識に照らして世礼声楽譜を見た時、伝承されてきた唱法を正しく記述出来ていません。世礼先生の時代に解明出来ていなかった部分は現在の私達が世礼声楽譜を補完しなければなりません。世礼声楽譜は、とりわけ音階レ（三線譜乙）の扱いに多くの問題があり、琉球音階から外れた記述が目立ちます。

要点は、琉球古典音楽は①五音階で唄う・②唄音率の歌である。が、世礼声楽譜ではそれが理解されていません。ここで云う五音階とは、宮・商・角・徴・羽ですが、この五音階は中国、朝鮮、日本の音階の基本となるものと云われています。それは三分損益法から導かれた音階ですが煩雑になるのでここでの説明は省かせていただきます。宮・商・角・徴・羽は、音階ド・ミ・ファ・ソ・シに置き換え、三線譜の合・老・四・上・尺に相当すると理解して下さい。唄音率とは、四度隔てたドとファの間に一つの間音が入り、その中間音は浮動する。この三音が音階の一単位として上下に連なり旋律は進むと説明されます。従って、一オクターブの中には、下部にド・ミ・ファ、上部にソ・シ・ドと同型の「二全音＋半音型」二つの単位があることとなります。

山内盛彬は、琉球音階はドミファソ、ソシドレと連結して進むと書き残しております。田辺尚雄は、音は十分の一秒以上の継続が無ければ一個の音と認められないと述べています。それは次第下げ（次第上げ）の経過音には楽音は現れないことを意味します。

私達の工工四を調べてみましょう。上巻に収められている三十七曲中私たちが伝承している唱法と世礼声楽譜が合致するのは芋之葉節と大田名節の二曲だけで、残りの三十五曲は声楽譜の訂正が必要です。中巻の三十曲中昔嘉手久節一曲だけが合致します。残りの二十九曲は楽譜の訂正が必要です。下巻の二揚曲三十三曲では浮島節、前の浜節、夜雨節、タノムゾ節、ハイヨヤエ節の五曲だけが合致します。残りの二十八曲は楽譜の訂正が必要です。（下巻の残り続巻は割愛しました）

世礼声楽譜は、これまで聖書のような扱いを受け、触ることを忌避してきた感があります。世礼声楽譜の誤りについて指摘し、楽譜の訂正を求めた動きはこれまでもありました。説明不足で仲間の理解を得ることが出来ませんでした。琉球古典音楽の音階、旋法についてのしっかりした認識を持ち、文化の継承を誤らない為には、研究所を開き弟子を育成しておられる仲間みなさんの共通認識が不可欠と考え、このたび「琉球古典音楽・声楽譜の読み方」を上梓しました。一読をお勧めいたします。世礼声楽譜は未完です。未完成のままほっておくことはできません。それを補完して誤りのない野村流伝承の道を確認したいと思っております。皆さんのご理解を切望するものです。

私達を教えた先師方はご自分が師匠から習った通りの歌を唄って教えてくれました。その意味において、受け継がれてきた先師の歌は今のところしっかり伝承されていると思います。伝承は時を経るにつれて薄れ、書かれたものに負けてしまいます。今の若者は学校での音楽教育も充実し、楽譜を読む力が付いてきています。近い将来において教える側も学ぶ側も声楽譜に頼るようになると思います。世礼声楽譜の責任は重いものがあります。